

信州大学の英語教育：現状と将来

川出 才紀

外国語系

目的・概要

本稿の目的は、学生の意識調査を行い、信州大学の英語教育の更なる向上の為に何が出来るかを考えることである。以下に本稿の概要を示す。

I. アンケート

II. 問題点：アンケートが示唆すること

多人数教育（一斉授業，教師中心，精読・訳読方式）

III. なぜ上記の教育形態が取り入れられたか—時代背景

「多人数教育，一斉授業，教師中心」

- ・均質で優良な手工業労働者が大量に必要とされていた
- ・すべての者は平等に能力を持つという考え方
- ・経済的事情（効率を求め，個が置き去りにされた）

「精読・訳読方式」

- ・海外の進んだ情報を得る必要性があった
- ・古い言語観の影響

IV. 語学教育における多人数クラスの欠点

- ・教師中心の一斉授業に流れがちで，学生は受け身になる
- ・教師の目が届かず，脱落者が増える

V. 変化する時代の要請—量から質への変換

- ・「自己をしっかり持つ者」「コミュニケーション能力を持ち，議論ができる人」「指示待ち人間ではない，自ら臨機応変に行動できる人」が必要とされている
- ・「これまでの平均歯車型指導により生まれる総合点のエリートではなく，各分野でのスペシャリストが求められている」
- ・情報を集めるだけでなく，こちらから発信することも求められている

VI. 変化する言語観・変化する語学教育

- ・「static で完全なる言語が（化学式の一覧表のように）存在する」のではなく「言語はコミュニケーションを前提とした dynamic なもの」という捉え方へ変わってきた
- ・少人数クラス，コミュニケーション重視

VII. 世界的にも認められている少人数教育

- ・先進国の語学クラスは少人数（e.g. イェール，コロンビア，オックスフォード，ケンブリッジ大学）
- ・学者間でも語学教育には少人数クラスが有効という意見で一致をみている

VIII. どうすればいいのか（案）

- ・学生主体の授業を少人数で，コミュニケーションを念頭に置き，「伝えたいこと」と

「伝えたい気持ち」を引き出す

IX. 具体的には（試案として）

X. 信州大学の問題点

「学生が忙しい、動機づけが足りない」

- ・スケジュールが詰まりすぎである
- ・燃え尽き現象

「教師が忙しい、動機づけが足りない」

- ・ノルマと雑用が多く、疲れている
- ・システムの欠陥により、事務に過剰な負担がかかり、あふれた仕事を教師がこなさざるを得ない状況にある
- ・教育効果があまりあがらないことに焦燥感を覚えてしまう
- ・分属のプロセスに問題があり、教師がやる気を削がれた
- ・分属先がバラバラで、まとまった力が発揮できない
- ・縦割り行政の弊害が出ている
- ・教養部という責任母体がなくなってしまったので、カリキュラムを支える仕事が宙に浮いてしまった
- ・教師は学部への適応に忙しく、共通教育に力を割けない

XI. どうすればいいのか

- ・TA（ティーチング・アシスタント）の採用
- ・教材研究・研究の時間を確保できるよう雑務を整理する
- ・英語を選択制にするのも一つの手である
- ・卒業に必要な単位数を減らし、授業の中身をさらに濃くする
- ・図書館等にマルチメディア室、スタッフつきLL自習室などを設け、自主学習／教育支援体制を強化する

I. アンケート

信州大学の1年生（平成8年度）172人（うち工学部生155人）に英語の授業他に関するアンケートを実施した。以下がその結果である。

グラフ1)では英語Aクラス（40-65人前後）を取っている者のうち、一クラスあたりの人数が「多い」と答えたのは62.2%、「ちょうどいい」と答えたのは36.0%、「少ない」と答えた者は0%であった。学生の半数以上の者が現在の英語Aクラスの数が多いと感じていることになる。

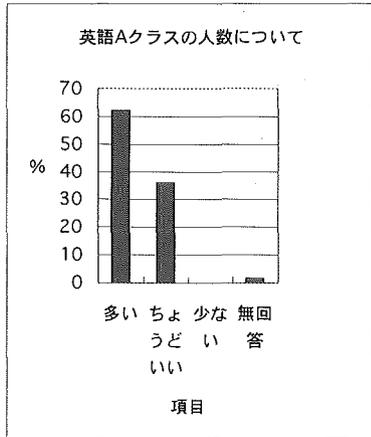
グラフ2)では、上の質問で「多い」と答えた者のうち、一クラスの大きさは、20人が適当と答えた者が32.1%、以下15人が22.6%、14-10人が21.7%と続く。

グラフ3)の英語の得意分野のうち、「読む」が得意（全体の45%）で、「書く」がやや得意（全体の22%）という学生の姿が浮かび上がってくる。反対に不得意分野では、「話す」「聞く」がそれぞれ全体の35.1%、31.4%で、これらが不得意分野のようだ。

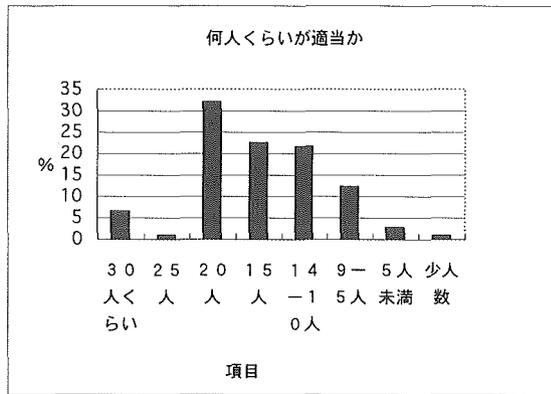
4) 学びたい英語は、「英会話、実用的な、使える英語」（94.2%）であった。海外旅行、営業、学会発表、論文など、どのような形であれ、自分から発信することも含め、実際の場で使える英語力をつけたいということであろう。(3)で明らかになった不得意／やや得意分野の

H8年度生アンケート（172人 うち工学部生155人）

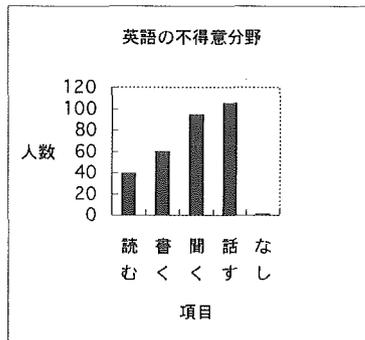
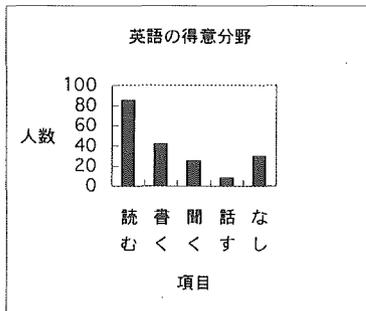
1) 英語Aクラスの人数について



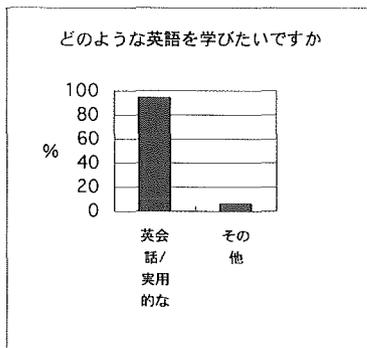
2) 多いと答えた人--何人くらいが適当ですか



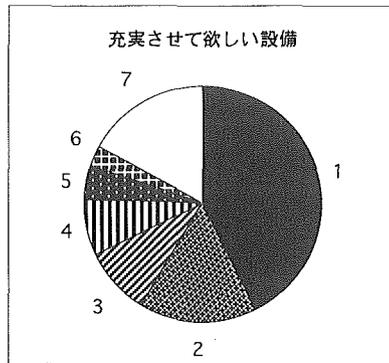
3)



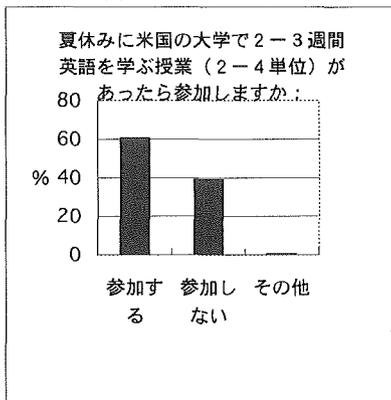
4)



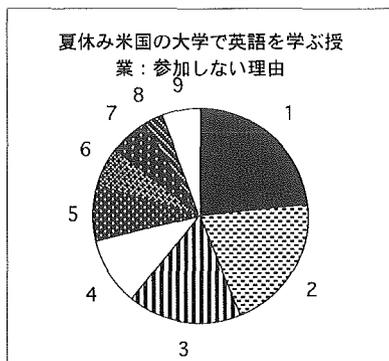
	%
5) 充実させて欲しい設備	
1 自由に利用できるパソコン端末	42.4
2 ビデオ試写室	16.2
3 LL自習室	9.3
4 図書館の蔵書	7.6
5 英語教官の増員	4.7
6 外国人教師と話せる場	2.9
7 その他	16.9
計	100



6) 夏休みに米国の大学で2-3週間英語を学ぶ授業(2-4単位)があったら参加しますか:



	%
7) 参加しない理由	
1 英語力がない	23.2
2 お金がない	20.3
3 他にやりたいことがある	17.4
4 期間が短い	10.1
5 こわい	8.7
6 面倒	5.8
7 興味がない	5.8
8 必要ない	2.9
9 その他	5.8
計	100

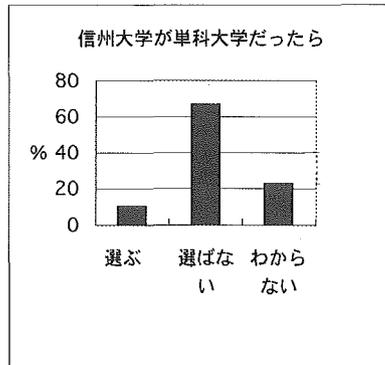


「話す」「聞く」「書く」を強化したいということがうかがえる。

文部省が公立小中学校で実施した「新学力テスト」の結果を分析すると、「思考力」「表現力」が不足している「日本型学力」の構造が変わっていないということが確認されたが、上記のアンケートの結果の「話す(聞くが前提)」「書く」力を強化したいという学生の希望もこのことを裏付ける。

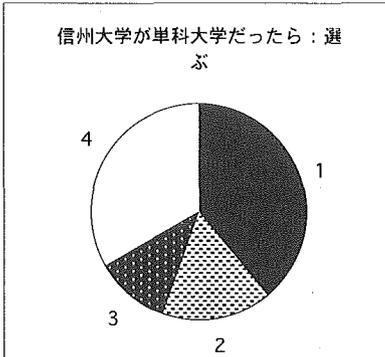
8) 信州大学が単科大学だったら：%

選ぶ	10.4
選ばない	66.9
わからない	22.7
計	100



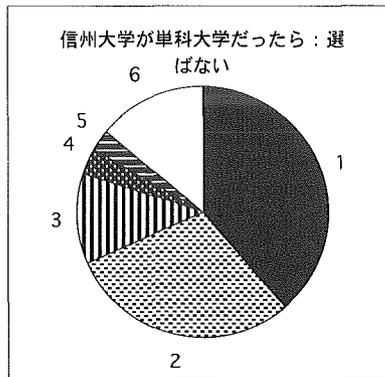
9) 選ぶ理由

1 学びたいことが学べればよい	38.9
2 勉強に集中できる	16.7
3 設備が充実していそうだから	11.1
4 その他	33.3
計	100



10) 選ばない理由

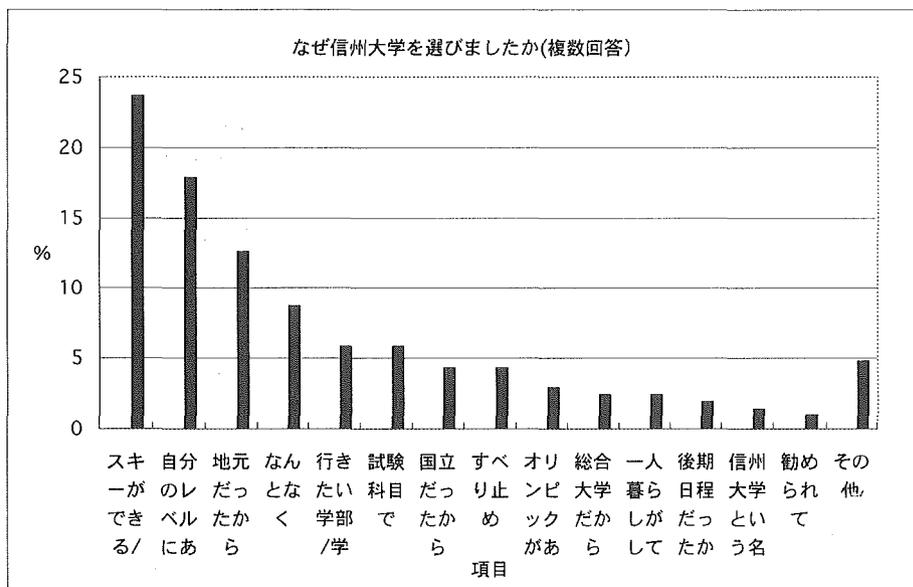
1 総合大学だから	38.6
2 様々な考えの人と出会えない	29.7
3 幅広い教育を望むから	11.7
4 女子が少ないから	3.4
5 本当は4年間一緒にいたい	2.8
6 その他	13.8
計	100



5) 学内に充実させて欲しい設備はグラフ(5)の通りで、「自由に利用できるパソコン端末」「ビデオ試写室」「LL 自習室」など、授業以外でも利用可能な施設の充実が望まれていることがわかる。こういった授業をサポートする施設の充実が計られれば、学生に課題を与えたりすることで授業時間を有効に活用でき、授業内容を濃くし、効率的な授業を実施することができると思われる。また学生の動機づけを促進するのにも役立つ。

11) なぜ信州大学を選びましたか(複数回答)

1 スキーができる/雪がある/自然環境がいい	23.7
2 自分のレベルにあった	17.9
3 地元だったから	12.6
4 なんとなく	8.7
5 行きたい学部/学科があった	5.8
6 試験科目で	5.8
7 国立だったから	4.3
8 すべり止め	4.3
9 オリンピックがある	2.9
10 総合大学だから	2.4
11 一人暮らしがしてみたかった	2.4
12 後期日程だったから	1.9
13 信州大学という名前を選んだ	1.4
14 勧められて	1
15 その他	4.8



6) 7) 夏休みに米国に英語研修(2-4単位)に出かけることに関しては、「参加したい」と答えた者は60.5%で、「参加しない」(39%)と答えた者を上回った。ただし、参加しない理由(グラフ7)は「他にやりたいことがある」「期間が短い」といった積極的なものがあったが、「英語力がない」「こわい」「面倒」「興味がない」などの消極的なものが多く見られた。また「参加しない」と答えた者の約半数(49.3%)は、問1)で、一クラスあたり的人数(40-65人前後)が「ちょうどいい」と答えており、英語学習に関して消極的な態度を持っていることがうかがえる。「お金がない」というような切実な理由に対しては、海外研修が実施されることになった際は、何らかの方策を考える必要があると考えられる。

8) 信州大学が単科大学だったら、信州大学を選ばないと答えた者が(66.9%)、選ぶと答えた者(10.4%)を上回った。

9) 選ぶ理由は「勉強に集中でき」「学びたいことが学べれば」よく、また「設備が充実している」ことを望むからで、充実した設備環境で専門的な研究を行いたいというあらわれと思われる。数は少ないが、充実した設備環境を望む声には耳を傾ける必要があるだろう。

10) 選ばない理由は「総合大学で」「様々な考えの人と出会い」「幅広い教育を受けたい」からで、広い視野を持った応用力のある人間教育を望むあらわれと考えられる。学生にとって、自分と異なった分野の人と話す喜びは大きく、学ぶことも多いのだろう。それが信州大学の大きな魅力となっていることははっきりしている。

11) 信州大学を選んだ理由（複数回答）は、「スキーができる、良い自然環境」等の恵まれた立地条件が大きくかわっている（23.7%）ことがうかがえる。2位の「自分のレベルにあっていた（17.9%）」は、偏差値で志望校を決める最近の傾向から仕方のないことであるが、何か寂しい気もする。また、これ以外の理由でも(5)の「行きたい学部／学科があった」以外に積極的な理由がみつからないのが、気にかかるところである。

II. 問題点：アンケートが示唆すること

上記のアンケートの集計結果から、わが国で行われてきた語学教育の問題点が浮かび上がってくる。今まで大学英語教育があまり効果をあげられなかったと言われているが、その理由は、以下のような伝統的な英語教育の形態によるところが大きいのではないと思われる。

A. 多人数クラス

- a. 一斉授業*
- b. 教師中心
- c. 精読・訳読方式
- d. 減点主義

*注：40—50名の学級というひとつの場でクラス全員に同時に同一内容を聞かせ、発話させ、読ませまたは書かせたりする指導。

III. なぜ上記の教育形態が取り入れられたか—時代背景

- ・高度成長時代、均質で優良な働き手が大量に必要なため、多人数で教師中心の一斉授業という形態でも可だった。
- ・教育とは、目の前の効率のみを追うべきものではなく、お金と手間と暇をかけなければ、花開かないものだが、戦後はその余裕がなかった。

訳読方式が取り入れられた背景：

- ・漢字（象形文字）を使う日本語は、目で見て理解する要素が強いため、訳読が自然に受け入れられた素地がある。
- ・欧米の進んだ情報を得る必要性から、英書を訳すことが中心となった。また、カセットテープ等の AV 機器が普及していなかったという事情もそれに拍車をかけた。

IV. 語学教育における多人数クラスの欠点

- ・多人数クラスの語学授業は画一的で柔軟性に欠け、個性が発揮できない。
- ・ある程度の緊張感は、学習効果にプラスに働くが、多人数クラスでは、この緊張感を学生全員に持続させるのが難しい。
- ・教師一人で、生徒全員を引っ張っていくのは困難（教師が疲れていると学生ものってこな

い)である。

- ・教師の目が常に全員に届くとは限らない。
- ・学生が、自分一人くらいさぼっても構わないだろうという気持ちになってしまう。
- ・習熟度の違う学生を同一クラスにたくさん抱え込むことになる。そのため教師が照準を合わせたレベルの学生以外は、脱落しやすい（少人数であれば習熟度の違いはそれほど気にならないのであるが）。
- ・多人数クラスの中の英語の嫌いな学生にエネルギーを注ぐと、伸びる学生にまで手が回らないことになってしまう。

—一斉授業・教師中心の授業の欠点—

- ・多人数クラスでは、短時間に全生徒を活動させるには、一斉授業という形を取らざるを得ず、様々な教育的試みが施せない。
- ・一斉授業では、教師中心、訳読中心、学生は受け身になりがちである。
- ・一人が発言している間は残りの学生は聞いているだけである。
- ・教師がしゃべり、生徒はそれを黙って聞いているだけでは、「ことば」は使えるようにはならない。
- ・言われたことはできるが、自主的な行動はできなくなってしまう。

一斉授業の利点／欠点に関して納谷（1969）は次のように述べている。

40—50名の学級という一つの場でクラス全員に同時に同一内容を聞かせ、発話させ、読ませまたは書かせたりする一斉指導は、短い時間内で全生徒を活動させ得るという利点がある。クラス内のなるべく多数の生徒を活動させるには、この形に多分に、すがらなければならぬ。ただし、生徒個々がそれほど緊張感を保って全体活動に参加しているのではないことにも気づくべきである。生徒の何パーセントかは（少しドリルが長くなるとこの割合は次第にふえるものである）、必ずしも積極的な参加をしておらず、多数の中にまぎれこんでうごめいているにすぎなかったりする。このことは、授業参観のとき、生徒の列の真後ろでなくむしろ横にたって観察するとよくわかり、いまさらながらと驚くところである。その責任感の弱い学習態度からは、学習効果の正確度のあまり多くを望めないし、この形だけでおしとおすとき、学級の中に倦怠感がうまれ、学習の能率はかえって低下するかもしれない。

さらに高梨ら（1990）は、一斉授業を脱却する必要性を説いている。

（近年、教育の現場では、）学習者のニーズを分析して、できるだけそれに応えようとする傾向がでてきた。しかし、画一的なものを指向する傾向の強いわが国では、授業も圧倒的に一斉指導が多く、学習者1人1人のニーズは全体的な目標（たとえば「受験」）のために犠牲にされがちである。…一斉指導が支配的なわが国においては、一斉指導の弊害をできるだけ少なくし、生徒一人一人を生かすための方策を考えることは、教育に課せられた使命と言ってもよい。

—精読の欠点—

- ・少ない量を精読していたのでは、なかなか力がつかない。
- ・一語一語英語から日本語に置き換えても、「木を見て森を見ざる」のごとく全体の情景を

思い浮かべられない。

- ことばの習得には「慣れる」ことが必要で、多読が効果的といわれるが、間違えないように精読していたのでは、多くを読めない。

―減点主義の弊害―

- 入学試験も含めて、これまで「完璧な言語」を習得することが求められすぎてきた。「冠詞をひとつ間違えると減点される」では、こわくて使えない。

V. 変化する時代の要請：量から質への変換

- 現在の国際社会の中では、「大量の均質で優良な働き手」よりも、まわりの状況を見極めながら、自分の判断で臨機応変の行動がとれる人間が求められている。
- 企業でも、各状況下で柔軟な対応のできる人間を求めている。(e.g.タイの工場で技術指導をしていて、トラブルが起きた時、それに応じた対処ができる者)
- 「すべての者が平等に能力をもつ」考えから行われてきた平均歯車型指導によって「平均的な優等生を多く作る」ことよりも、少人数クラスの中で個性を見極め、「花に水をやるように」個々の学生の突出した才能を伸ばしてやり、各分野でのスペシャリストを育てることも必要なのではないだろうか。
- 米国に見習ってインターンシップを取り入れた日本のある企業では、学生と共同研究を行う中で人物を見極め、採用を決めるといふ。その企業では、「議論のできる人」「本当の意味で個性を持った人」「潜在的なコミュニケーション能力を持った人材」を求めているという。
- 就職協定の廃止に伴い、企業は人物をじっくり見極める時間を得、学生は面接の仕方をマニュアル通りに練習する時間がないまま、企業訪問することともなった。学生は普段から考え、自分の意見をまとめ、如何にうまく相手に伝えることができるかを訓練し、自分から進んで道を切り開き、使いものになる本物の実力を身につけることが要求されている。
- 付け焼刃やマニュアル人間では、もはや就職戦線を勝ち残れないが、これまでの教育方法では言われたことしか、きちんとやれない指示待ち人間を育てる懸念がある。
- 的確な判断を下す能力とコミュニケーション能力は、「考えさせ、議論させる授業」の中で生まれる。相手との議論の中から、良いアイデア、最も良い解決法を導き出すことを学び、コミュニケーション能力を開発していく。と同時に、考え方が異なる相手とも辛抱強くつきあっていくことを学ぶ。今そんな授業が必要とされているのではないだろうか。
- 多人数の一斉授業だけでは、個性は育たないし、日本人学生が不得意だとされる「思考力」「表現力」もなかなか身につかないだろうことから、ゼミ方式の少人数クラスの導入が不可欠である。方法は、学生中心で、コミュニケーション重視を念頭においたものになる。コミュニケーションの基礎である語学の授業はこの方式で行うべきである。
- 豊かな教養と幅広い視野を身につけることもないがしろにできない。コミュニケーション能力、的確な判断力はこれらが支えるのである。特に異分野の知識に触れることが後になって専門にも役に立ち、思わぬ発見につながることもあるはずである。また、広い視野を持つことは片よりのない人間を作るとともに、応用力をつけ、専門で行き詰まった時には

解決の糸口をくれることもあるのではないだろうか。

- 以下の「コロンビア大学のコアカリキュラム」に示された大学教育を参照されたい（寺沢1996）：

「コアカリキュラムはコロンビア大学の特徴であり、知性の鍛錬である。その中心には、4つの一般教育コースがあり、これは、人間であるとはどういうことかを探求する試みである。そして、コロンビアの全学生に、その専攻が何であれ、生き生きとした西洋文学、哲学、歴史、音楽、芸術という我々が代々受け継いできた財産を提供する試みである。しかしながら、これらのコースの内容と同等に賞賛されるべきは、小クラスの中でのやりとりの経験であり、これらのコースの成功の真の秘訣はここにある。およそ24人を最高とするゼミで学ぶことによって、コロンビア大学の教育が、受け身ではなく、学生の自発的な精神の働きで始まることを保証する。その結果として、これらのコースは、最良の意味で、コロンビアの学生が取りうる最も実用的なものとなる：観察、分析、議論、想像力に富む比較、考えやニュアンスに対する関心によって研がれる能力や習慣は、今日の世界の聡明な市民としての人生に歩を踏み出すための厳しい準備にほかならないのだ。」

- 別の観点から：相手と議論し、意見を修正し、幅広い視野と平衡感覚を身につけた人物は、偏狭な考えにとらわれた団体への傾倒を回避できるという点もあげておきたい。

また、今の若者は傷つくことを恐れるあまり、希薄な人間関係しか築かないと言われる。今の時代には「話し合う」「自分を表現する」という場が足りないのではないか。相手と議論するという事は、相手を良く知ることである。その上で、自分とは違った個性、違った考えや意見をもつ者を認め、彼等と辛抱強くつきあっていくという経験を積むことが大事なのだ。ぶつかりあう中で、「傷つく」ことに対する免疫をつけてゆく。さらに、ぶつかりあう中で、相手を知り、個性を認め、違った奴とも辛抱強くつきあうことを学ぶことが、もうひとつの大きな問題—「いじめ」の解決にもつながるのだろう。

VI. 変化する言語観・変化する語学教育

—変化する言語観—

- 言語学の世界では「staticで完全なる言語の構造を分析し、記述する研究態度」から「(コミュニケーションを前提とした)dynamicな言語を認知的に研究する態度」に変わってきている。
- 研究対象が「言語そのもの」から「言語を使用する人間」「人間がコミュニケーションすること」に変わってきた。

—変化する語学教育— 少人数クラス、コミュニケーション重視

- それを受けて、語学教育の世界でも「化学式や数学の公式の一覧表のように、完成された言語が目の前にあり、それを覚えれば良いのではない。きれいな文法を覚えるだけではない。ことばは生きものだ。ことばのやりとりをしながら、実際に使わなければ身に付かない。作文でも、相手を想定しながら、如何にうまく伝えるかを考えながら書かなければ役に立たない。」という考え方が生まれてきた。

- ・海外の進んだ情報を取り入れることも必要だが、こちらから海外へ発信することも求められるようになってきており、「発信型、コミュニケーション重視」の教育に移行してきている。ことばとは、コミュニケーション（双方向伝達）のためのものつまり「ことば」は、こちらの想いを伝える手段であり、相手を想定するものという前提にたった教授法に比重が移ってきている。
- ・精読・訳読方式のみではなく、多読も盛んに取り入れられてきている。
- ・「伝えたいことを誤解なく伝えられればよしとする」観点から、細かい文法的な規則よりも内容重視に比重が移ってきている。
- ・心理学者 Carl Rogers (1951)によると「教師の使命は、..大量の知識を、プログラムに組み込んで学生に与えることだと思ってはならない。言語学習における教室活動や教材は、“一人前の大人”になりつつある者どおしが、本物のコミュニケーションを、意味あるコンテキストで用いるものでなくてはならない」と述べている。
- ・その実現のためには少人数クラスが不可欠であろう。

Ⅶ. 世界的にも認められている少人数教育

- ・理論上、語学教育のクラスの大きさは、学者によってその見解が1—2人、5—6人、10人とわかれるが、少人数が良いとされる。
- ・以下は私見であるが、実際、欧米では、少人数クラスと大講義クラスを効率よく配置しており、語学の授業は、基本的に前者で行われる。
- ・仏では、外国人向けの語学クラスが25人を越え、教師がストライキを行った。
- ・米国では：イェール大学—外国語クラス6—15人程度、コロンビア大学—外国人のための英語クラス10人程度である。
- ・英国では：ケンブリッジ、オックスフォード大学—語学系の授業10人程度である。

Ⅷ. どうすればいいのか（案）

以下に上の問題に対する対処法を考えてみた。

—多人数クラス、教師中心、一斉授業については：

- ・言語学習では、授業の場におけるより多くの自己表現が必要である。小集団学習によって、より多くの、また、より自由な自己表現を可能とする。
- ・少人数化によって、学生の個性と能力を見極め、きめ細かい指導をする。
- ・少人数化によって、学生の羞恥心などの心理的抑圧を軽減する。
- ・一斉授業による学生の受動的な態度から、積極的/能動的態度への変換をはかる。
- ・教師一人当たりの担当学生数を適正化することによって、突っ込んだ指導を可能にする。
- ・学生を忙しくさせる工夫を更に徹底させる。
- ・学生主体の授業に移行させる。
- ・学生に考えさせ、その考えを如何にうまく相手に理解させるかを、議論とクラス発表を通して学ばせる。
- ・少人数クラスでコミュニケーションを重視する一子どもがことばを覚えていく過程を見ても、まず「伝えたい」という強烈的な意志が働いていることがわかる。授業でも、学生から

「伝えたいこと」「伝えたい気持ち」を引き出し、コミュニケーションが必然となる状況を作り出す。

—精読・訳読方式については：

- ・多読させる。
- ・英語を日本語に自動的に置き換える作業をするのではなく、何が書いてあるのか、全体像を常にイメージさせる。
- ・学生のレベルによっては英英辞典を使用させる。
- ・書かれたものは、発信者からコミュニケーションされてきたものと理解する。

—減点主義については：

- ・「完璧な言語を目指す」というよりも「コミュニケーション」を主眼にし、伝えたいことと伝えたい気持ちを引き出し、少々の間違ひは良しとする。

—「わかる」ことと「できる」ことの違い—

- ・ことばについて「わかる」ことと、ことばを「使える（できる）」ことは違うが、語学では、「使える（できる）」ことまで求められる。
- ・「車の仕組みは知っているが、運転できない」のと同じように、ことばの仕組みや文法が頭で「わかって」も、「使え」ないと学習効果があったと評価してもらえない。
- ・言語そのものについて、また言語を支える文化・歴史について「わかる」だけなら多人数でよい。「できる」授業を望むなら少人数にすべきである。

—その他—

- ・英語は耳から聞き、かつ発音することが大事ということを再確認する。発語は脳のブローカ野（運動系中枢）、聴認識はウェルニッケ野（感覚中枢）が関わっていると、これまで思われてきたが、子音の聴認識には運動系と思われていたブローカ野が担っているらしいことがわかってきた。聴認識に運動系中枢が関係するという（Zatorre et. al 1992）から、「発音できる音は聞き取れる」「あることばを聞いたとき、そのことばを頭の中で発声してみると認識できる」「黙読の際に心の中で声を出している」等の現象注目すべきことがわかる。だから、単語や文をすらすら発音できれば楽に聞き取れ、黙読も早くできるはずである。
- ・音声学をベースにした発音訓練とリスニングを取り入れる。
- ・正しい発音ができれば、音読のみならず、黙読も早くなるはずである。
- ・スタッフ付き LL 自習室を設置する。

IX. 具体的には（試案として）

以下に、可能な授業のやり方を2つあげてみる。もちろん、この他にも様々な方法が考えられる。

「わかる」の部分を授業で、「できる」の部分を課題として教室以外でやらせ、再び授業で習得度を見る。たとえば、発音・聞き取りのクラスでは：

- | |
|---|
| 1. 「理解する/わかる」の部分として
英語の発音記号・発声/発音の仕方
英語独特のリズム/強勢/イントネーションの仕組み……………授業で提示 |
| 2. 「できる」の部分として
発音の練習・聞き取りの練習……………LL 自習室で独習 |
| 3. 習得度を確認……………授業で |

プレゼンテーション・討論のクラスでは：

- | |
|--|
| 1. 「理解する/わかる」の部分として
テーマを決めて、
よく使われる表現の整理・発音練習・問題点の把握……………授業で |
| 2. 「できる」の部分として
アンケートを実施して、統計をとったり、
関連資料を読んだりして、意見をまとめる……………図書館・街頭で |
| 3. 発表……………授業で |

- ・導入として、理系の学生には、自然科学系のテキストを読み、語句の整理をしたり、テーマについて考える。
- ・グループ討論で、学生に問題意識を持たせ、伝えたい気持ちを引き出す。

—その他の試みとして：

- ・学生の意識を喚起するために一年間どういうことを目標に勉強するのかという「年頭の決意」文を書かせる。
 - ・副読本を持たせ、何回かの小テストを課すことによって、多読させるよう仕向ける。
 - ・主/副読本から、音読の試験を課すことによって、多読させる。
 - ・言葉に関する講義も採り入れ、考えさせるような話題と課題を提供する。
 - ・英語で自己紹介することによって、後期のプレゼンテーションの予行演習をする。
- 「できる」ことまで求められる語学の授業では、週2回の多人数クラスよりも週1回の少人数クラスで行き届いた指導をする方が、効果はあがると筆者は考えている。ただし、以下のことが必要である。
- ・学生に考えさせ、学生の興味を引き出す。
 - ・学生を忙しくさせる（課題を多く与え自主学習させる。学習環境の充実が前提となる）。
 - ・学生中心の授業にし、学生自身が工夫できる余地を与えることで、学生が自分から動き出すように仕向ける。
 - ・教師がいつも元気であること（元気でいられる環境づくりが前提である）。

X. 信州大学の問題点

さて、ここで、一般的な問題点から、信州大学独自の問題点に目を移してみたい。

1. 忙しい学生

- ・学生の時間割/スケジュールが詰まりすぎである。必要単位数が過剰で、スケジュールを

こなすだけで、じっくり考え、課題に取り組むこともできないのではないか。

- ・アルバイトが忙しい（アルバイト先の都合で授業時間まで拘束される、夜間のアルバイトで授業中眠くなってしまう）。

2. 学生の動機付けが必ずしもうまくいっていない。

- ・受験戦争を勝ち抜いてきた後の脱力感におそわれ、目標を失ってしまった学生、開放感にあふれ、さあ遊ぶぞと意気込んでいる学生、詰め込み教育、暗記付けの学生に学問のおもしろさを見つけたさせせることは困難な仕事である（これは決して学生のせいではないが）。
- ・嫌な必修科目を取らなければならないので動機づけができない。
- ・希望に燃えて入学した（動機づけられている）学生も大学に失望して(disillusion)しまう。

3. 忙しい教師

- ・特に共通教育担当の英語教師のノルマ（クラスサイズ、コマ数、教師一人当たりの担当学生数の観点から）と雑用が多い。
- ・研究と教材研究に十分な時間がとれない。
- ・教師が疲れているので、授業で学生をのせられない。
- ・人数がまとまれば片づく仕事も、教師が分散してしまい、まとまれないので効率よく片づかない。

4. 教師の動機付けが必ずしもうまくいっていない。

- ・上記の様々な理由から、教育効果があまり上がらないことに焦燥感を覚えてしまう。
- ・大学改革のプロセスに問題があり、教師がやる気をそがれてしまった。
- ・英語教官の分属先がばらばらで、教官相互の連帯感と士気を弱めてしまった。
- ・教師は学部への適応に忙しく共通教育に力を割けない。
- ・英語の運営上の情報が、現場（末端）の教師には伝わってこない。

5. 英語関係の活動を統括する組織がない。

- ・（旧教養部）がなくなり、縦割り行政の弊害があちこちで出ている。
 - （e.g.1）概算要求を出してもセンター、学部、分科会とばらばらで非効率、一貫性がない。
 - 2）教官が5人まとまれば、10の仕事ができるが、1人では1の仕事しかできない。
 - 3）各種会議の開催日が学部ごとにまちまちで、英語教官が集まりづらくなってしまった。
 - 4）英語教官が、それぞれ異なった学部にも所属していることから、利害関係／考え方がまちまちで、協同で何かをすることが困難になってしまった。）
- ・授業に関する教師個々人の努力はあるが、全体としてまとまった力にならない。系統だったカリキュラムがない。

XI. どうすればいいのか

以下に、例として可能な方策を掲げてみた。

1. 忙しい学生には：

- ・英語の必要単位数を減らす。（代わりにこれまで以上に中身の濃い授業にする。学生が自分で考えて行う課題を多く取り入れ、自主学習をすすめることが前提である。）英語を選

択にするのも一つの手である。

- ・学内アルバイトを増やし、できるだけ学生が外で働かなくても良いようにする。(勉学に支障のないように、時間数の上限は設ける。)
- ・奨学金の確保
- ・寮の増築

2. 学生の動機づけがうまくいっていないことについては：

- ・学習環境の整備 (e.g. 教室, 図書館, 学習室, スタッフつきLL自習室, パソコン端末室, ビデオ試写室, マルチメディア室等を充実させ, 学生の自主学習の支援を行う)
- ・小中高の教育を見直す。
- ・受験制度/中身を見直す。
- ・教師が努力する。
- ・上級者の教育に, これまで以上に力を入れる。授業のハードルを高くする。

3. 忙しい教師には：

- ・TA(ティーチングアシスタント)の積極的採用をはかる。
- ・教材研究・研究の時間を確保できるよう雑務を整理する。
- ・教師一人あたりの担当学生数の適正化をはかり, 教師の疲労を軽減し, きめの細かい指導を可能にする。
- ・英語を選択制にするのも一つの手である。
- ・卒業に必要な英語の単位数を減らし, 授業の中身をさらに濃くする(図書館等の学習環境を充実させ, 自主学習を支援することが前提である)。

4. 教える側の意識の活性化には：

- ・折に触れての集まり, 情報交換, 授業のアイデアの交換を積極的に行う。(英語教官のたまり場が必要である。)
- ・非常勤講師も含めた連携/協力が必要である。
- ・海外への研修(教授法を学ぶ等), 海外の教育施設やシステムの視察, 帰国後のフォーラム, 勉強会の開催(教官が海外へ出やすくすることが不可欠である。)
- ・雑用からの解放, 教材研究の時間の確保, 教師が感動をおぼえる時間的・精神的余裕を与える(雑用を効率的に片づけるシステムが必要である)。
- ・研究時間の確保(長い目でみれば研究していないと学生がついてこない)。
- ・教師の身分/待遇の保障(自身が大事にされてこそ学生を大事にできると筆者は考える)。

5. 英語関係の活動を統括する組織がないことに対しては：

- ・大学全体を見渡しながら, 「効果的な授業・カリキュラムとは何か」を考える場が必要となるかもしれない。ただし, 学部の下請けとなつてはいけなし, 同時に学部の意見を反映できるものでなければならない。語学教育の専門家が加わるのが有効だろう。

XI. 2 & 4 を以下にまとめている。

学生の動機づけに必要なことは：

学習環境の整備……………クラスの少人数化

図書館の蔵書の充実とスタッフの強化

自習室の増設

スタッフつき*LL自習室の設置

パソコン端末の増設, 等

(*注: 京都大学, 同志社大学等で実施)

教師の動機づけに必要なことは:

教育・研究環境の整備……………クラスの少人数化/適正な担当学生数

教材研究時間の確保

研究時間の確保

海外研修と学んできたことの還元

(常勤・非常勤) 教師間の密な連絡・情報交換

学部と(常勤・非常勤) 教師間の密な連絡, 等

XII. おわりに

以上, 大学の英語教育の抱える問題を, 一般的・信州大学独自の二つの観点から概観してきた。

授業の形態としては, 「ことば」がコミュニケーションを前提としたものである故に, その運用力の習得を目的としたクラスは小人数で行い, 学生の「伝えたいこと」と「伝えたい気持」を引き出し, たとえば討論などの, コミュニケーションが必然となる状況を作り出すのが有効であろうと考えられる。

また, 運用力の習得には, 時間と努力を要するものであるので, 多くの学生が望んでいるように, 自主学習を支援する学習環境の整備を行う必要があるであろう。たとえば図書館などにビデオ試写室, LL自習室, パソコン端末などを備えたマルチメディアセンターのようなものを設け, スタッフの支援のもとに, 学生が自主学習を行ったり, 授業の課題をこなすことが考えられる。そこを拠点とする遠隔教育, 学生と教師向けの様々なワークショップ/フォーラム, 正規の授業, 授業の補助を行うことも有効であろう。特に語学は, 教官同士の連携が不可欠な科目である。「授業を如何に行い, 教育システムをどのように整えれば効果的なのかを考えるために, 教授法を学ぶなどの海外研修を行ったり, 教育システムの視察を行う」「語学教官の交流の場を設け, 情報交換を行ったり, 授業に関する知恵を出し合い協力する」ことが, さらに必要だと思われる。

大学の教養教育としての英語を今後どのような形で行っていくのが良いのか, すべての人が学部の立場を超えて真剣に話し合う時が来ているのではないだろうか。

本稿は平成9年2月13日-14日に開催された信州大学「教養教育に関するフォーラム」で発表したことをもとに, 加筆したものです。ですから現在, 信州大学では改革が進行中の部分があることをお断りしておきます。なお, 本稿は, 信州大学の共通教育, とりわけ英語教

育を取り巻く状況を、一英語教師の目から見たものです。同じ現象に対しても様々な解釈・評価が可能であることは当然ですが、本稿が信州大学の共通教育について考えるきっかけとなってくれればと願っています。皆様の忌憚のないご意見・ご批判をいただければ幸いです。

参考文献

- 納谷友一（1969）講座英語教授法第1巻『授業の進め方』 研究社
 Rogers, Carl. (1951) *Client Centered Therapy*. Boston: Houghton Mifflin Company.
 Zatorre RJ, Evans AC, Meyer E, Gjedde A. (1992) Lateralization of phonetic and pitch discrimination in speech processing. *Science*. 256 pp.846-9.
 高梨庸雄／高橋正夫（1990）『英語教育学概論』金星堂
 寺沢才紀（1996）図書館システム『教育システムに関する海外事情調査報告書』信州大学 pp.19-41.

付 録 I

アンケート（抜粋）

1. 英語Aクラス*の人数について、どう思いますか。
 - a. 多い
 - b. ちょうどいい
 - c. 少ない

（注* Aクラスは、1クラスあたり40-60人前後で行われている。）
2. (a)(c)と答えた人：何人くらいが適当ですか。
3. あなたの英語の得意分野を教えてください。

得意：a. 読む b. 書く c. 聞く d. 話す
 不得意：a. 読む b. 書く c. 聞く d. 話す
4. 今後どのような英語を学びたいですか。
5. どのような設備 施設を充実して欲しいですか。
6. 夏休みに米国の大学で2-3週間英語を学ぶ授業（2-4単位）があったら、あなたは参加しますか。
 - a. 参加する b. 参加しない
7. 6の理由
8. 信州大学が単科大学だったら、あなたは信州大学を選びますか。
 - a. 選ぶ
 - b. 選ばない

理由：
9. あなたは何故信州大学を選びましたか。（複数回答）

付 録 II

学生の声（アンケートより）

—信州大学が単科大学だったら、信州大学を：

選ぶ（自分のしたいことが集中してできるから）

選ぶ（単科大学になれば大学経営上、工学関係に専念され、施設の充実も望めるから）

選ばない（総合大学の方がずっと魅力がある。実際、今こうして学部が上がってからバラバラになってしまうのもすごくさみしい）

選ばない（工学など、自分の専門のことばかりに先走って結局は自分の専門で行きづまりを感じるのには目に見えている。工学部だからこそ、科学倫理をやる必要があるのに、皮肉なことにそれをやるのは文系の人たちである。

選ばない（以前某単科大学にいた経験から言って、絶対にいやである。大学の良い所というのは、様々な考え方をを持った人に会うことができることである。この大学に来て、他学部の友人や先生と話して良い刺激をたくさん受けた。実学だけが学問ではない。

選ばない（総合大学で多方面に友人が出来るかどうかを基準に大学を選んだから）

選ばない（総合大学だからこそ、他学部との交流が深くなるので）

選ばない（総合大学へ行きたいという願望があったから。一年の時ぐらい様々な学部の人に触れたい!!）

選ばない（総合大学の方が専門以外のことも身につけそうだから）